

—和歌山県・3万年の歴史を紹介しています—

今からおよそ3万年前の後期旧石器時代に、現在の和歌山県内でも人々が暮らし始めたようです。その後、縄文時代には土器や弓矢、弥生時代には稲作という、新たな道具や技術が生活に加わっていきました。  
《番号2～5》

地域の豪族とヤマト王権との政治的な関係を表す古墳は、県内では4世紀後半に登場しました。7世紀の初めには、現在の和歌山県にほぼ相当する範囲が紀伊国となり、人々は律令国家による支配を受けました。  
《番号6～10》

都に近く、温暖な気候の紀伊国には、地域の有力な寺社だけでなく、都の貴族や寺社が支配する荘園が数多く成立しました。荘園を実際に管理する武士たちは、農民らと対立しながらも、強い力を持つようになりました。  
《番号11～13》

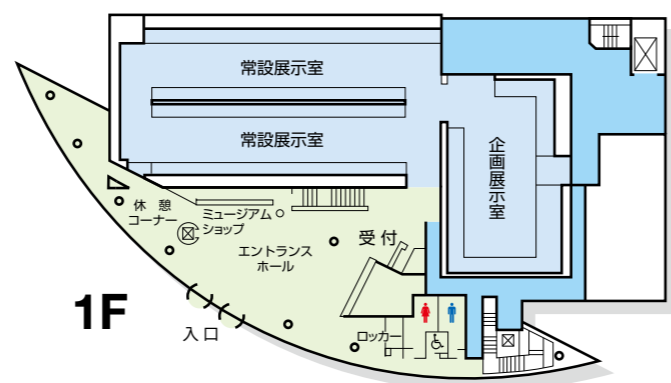
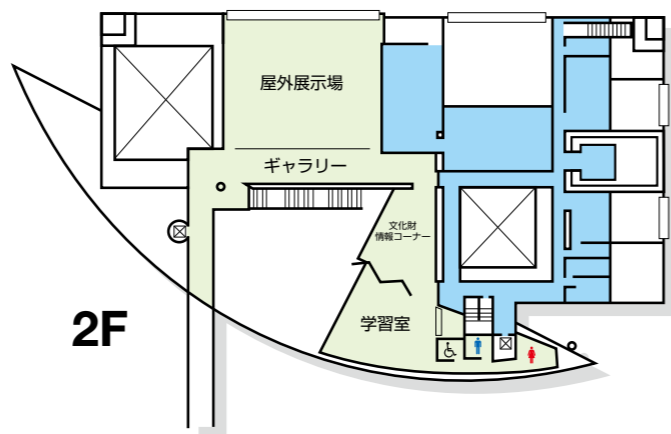
きのくに—和歌山県には、高野山や熊野三山をはじめ、道成寺・紀三井寺・粉河寺など、多くの霊場があります。それらの霊場を結ぶ道も開かれ、全国から多くの参詣者が訪れ、現在でもその波が絶えることはありません。  
《番号14～19》

古くからの支配やきまりがくずれていった時代の中で、農民たちは「惣」という自治組織を作り、自分たちを守ろうとしました。農民たちの力が強かったことなどから、紀伊国では戦国大名は登場することができませんでした。  
《番号20～23》

浅野氏と紀伊徳川氏が紀伊国を支配したこの時代には、山や海の豊かな自然を利用して、現在にも受けつがれる産物が生み出されました。また、全国にも誇れるような、すぐれた学問・技術・芸術もみられるようになります。  
《番号24～29》

明治時代の初めに、紀伊国の大部分が現在の和歌山県となりました。急速な近代化により、綿ネルや皮革産業などの新しい産業が生まれた一方で、人々には納税・徴兵・教育など新たな義務が求められるようになりました。  
《番号30～34》

館内案内図



利用案内

- 【開館時間】 9:30～17:00(入館は16:30まで)
- 【入館料】 ◎一般280円(220円)・大学生170円(140円)  
(特別展開催期間は、別料金となります)  
◎高校生以下・65歳以上の高齢者・障害者および県内に在学中の外国人留学生は無料
- 【休館日】 ◎毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は次の平日)  
◎年末年始(12月29日～1月3日)  
◎特別展展示替期間



常設展

きのくにの歩み

—人々の生活と文化—

和歌山県立博物館

和歌山県の歴史

—和歌山県立博物館の常設展では、きのくに



きのくにのあけぼの

原始・古代①  
(3万年前～1,700年前)

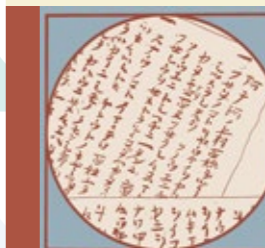
旧石器時代  
縄文時代  
弥生時代



古代国家と紀伊国

古代②  
(1,700年前～960年前)

古墳時代  
奈良時代  
平安時代



荘園と武士

中世①  
(960年前～680年前)

平安時代  
鎌倉時代



きのくにの祈り

—霊場の成立と熊野信仰—



動乱の時代

中世②  
(680年前～430年前)

南北朝時代  
室町時代  
戦国時代



紀州藩と領民

近世  
(430年前～150年前)

安土桃山時代  
江戸時代



和歌山県の誕生

近代・現代  
(150年前～現在)

明治時代～  
現在



## 4 銅鐸の祭り

銅鐸は、弥生時代に独特の青銅器で、農業に関わる祭りに用いられたと考えられています。銅鐸は本来は楽器で、中に吊り下げた舌の当たる音を聞いたのでしょうか。その後、大型化して飾りが目立つようになり、見て拝むようなシンボルへと変わったようです。ムラのはずれや山の中から出土することが多いので、時代が移り使われなくなった銅鐸は、土に埋めて捨てられたと考えられています。

## 2 貝塚にみる縄文時代の生活

貝塚とは、いわば縄文人の「ゴミ捨て場」です。そこには、人々が食料とした貝類の殻や動物の骨、使わなくなった土器・石器のかけらなどが積み重なっており、当時の人々の生活をさぐる多くの手がかりが残されています。県内には、縄文時代早期後半の高山寺貝塚や、縄文時代後期の鳴神貝塚などの貝塚が発見されており、当時の生活や環境などを知ることができます。

## 1 常設展「きのくにの歩み ―人々の生活と文化―」

和歌山県立博物館の常設展は、おもに人々の生活に視点を置いて、きのくに―和歌山県の3万年にわたる歴史を紹介しています。原始・古代から近代・現代へとつながる歴史の流れを、時代の順に6つのゾーンに分けて紹介します。また、紀州の文化を特徴づける、高野山や熊野などの「きのくにの霊場」については、一番奥のコーナーでとりあげています。

## 35 人々と戦争

昭和6(1931)年、満州事変をきっかけに、日本は国内外に多大な被害をもたらしたアジア・太平洋戦争に突入しました。経済面においても様々な支配が強まり、人々の日常生活には我慢が求められました。日中戦争が全面化した昭和12(1937)年以後は、戦争を行うための総力を結集することを目的として、徴兵だけでなく、戦時動員や貯蓄奨励・贅沢禁止が命じられるようになりました。

## 34 和歌山県の民衆運動

明治新政府は、急激な近代化を推進したため、様々な矛盾や不満が生じ、人々が反発や抵抗することがありました。地租改正への反対運動や、国会開設を求める自由民権運動、被差別部落の解放をめざす水平社運動などが各地で起こりました。しかし、大正8(1919)年の大逆事件のように、紀南の初期社会主義運動が弾圧され、さらに昭和に入ると、民衆運動は禁止されることが多くなりました。

## 5 土器の変遷

縄文時代には、土器が作られるようになりまし。表面を縄目の文様などで飾った縄文土器は、煮炊きをし、ものを蓄えるために用いられました。弥生時代になると、使い道に応じて、決まった形の土器が使われるようになります。古墳時代の中ごろには、野焼きで作られた土師器という土器に加え、丘の斜面に築かれた登り窯を使って焼かれた須恵器の作り方が朝鮮半島から伝えられました。

## 3 弥生時代の集落

弥生時代に入ると、水田に近い場所に、集落が造られるようになりました。人々は、稲作に必要な水の管理をするために、用水路ごとにまとまった集団を形成し、共同で農作業を行っていました。弥生時代後期には、戦乱が多く発生したため、山の上に築かれた高地性集落や、周りを溝で囲った環壕集落など、外敵からの攻撃を防ぐためのムラも造られました。

## ― 常設展の見方 ―

図の位置に置かれた、このような番号 **2** ― **35** は、パンフレットの番号に対応しています。

番号の順に進んでいけば、和歌山県の歴史を学習することができます。

それぞれの番号の位置で、このパンフレットの解説をご覧ください。

## 32 地租改正の実施

明治6(1873)年、明治新政府は「地租改正条例」を定めました。それは、近代的な税制を確立するための土地課税制度の変革で、土地の生産力や収益を基準に地価を定め、一定の税率を掛けた金額を、地券を交付された者に、それまでの物納ではなく、お金で納めさせるというものでした。しかし、農民の負担はかえって重くなったため、地租改正に反対する運動が県内各地で発生しました。

## 33 近代産業の形成

明治時代初めの藩政改革による殖産興業政策のもと、蚕養・生糸・製茶などの新たな技術が導入され、同時に綿ネルや皮革産業などが登場しました。また、銀行が設けられ、新しく事業を始めようとする士族などへの資金援助を行いました。一方、多くの霊場があった和歌山県では、海運や鉄道の発達を背景にして、大正から昭和時代初めにかけて観光地の開発が行われました。

## 8 律令国家の支配

7世紀の終わりに、中国の影響を受けて、天皇・貴族に権力が集中する律令国家が生まれました。律令制の下で、紀伊国は伊都・那賀・名草・海部・阿提・日高・牟婁という7つの郡で成り立っていました。また紀伊国には、都と地方とを結ぶ道である南海道が通り、淡路島や四国へとつながっていました。紀伊国を治めた国府や仏教の拠点であった国分寺などは、南海道沿いに置かれました。

## 6 古墳時代の和歌山

3世紀の後半には、大和王権の影響の下、各地に古墳が造られるようになりました。県内では、他の地方に遅れて4世紀の後半に前方後円墳が造られ始めます。5世紀末から6世紀になると、特徴のある横穴式石室が紀の川下流や有田川下流域で築かれ、一つの場所に古墳が集中する群集墳もみられるようになります。一方、田辺湾周辺では、岩陰に石組みで築いた独特の墓が造られていました。

## 7 古墳時代の集落

古墳時代に入ると、外敵からの守りを重視した集落は姿を消しました。それかわって、5〜6軒でまとまった平地の集落が一般的になりました。農業や土木技術の進展とともに、集落の数は増えますが、集落の中の家の数は少なくなります。一方、豪族たちは、農民の集落から離れた場所に、地面に穴を掘って柱を立てた掘立柱式の住居を築き、倉庫には富をたくわえました。

## 31 近代教育とその影響

明治5(1872)年、政府は学制を制定して、それまでの寺子屋や藩校に代わる近代学校の整備に取り組みました。これは、全国民に学校教育を受けさせようとする公教育思想によるもので、就学率は次第に高くなっていきました。大正時代には、県内で子どもの自由な教育をめざす新教育運動がめげえませんが、戦争につきすむ時代の流れの中で、軍国主義的な教育しか許されなくなりました。

## 29 紀伊藩の参勤交代

江戸幕府は、諸国の大名を支配するため、1年おきに領地と江戸に藩主を住ませる参勤交代を命じました。紀伊藩主は、3月に和歌山と江戸とを行き来するのが原則でした。参勤交代の経路は、初めは紀伊半島を横断する伊勢街道を通して、東海道に入りましたが、後には大坂・京を結ぶ京街道から、東海道や中山道を通るコースになりました。江戸までの移動には、約3週間かかりました。

## 9 古代国家と民衆

古墳時代に入ると、畿内地域を中心として、国家としてのまとまりがめばえてきました。人々は地域の豪族を通じて間接的な支配を受けていましたが、次第に政府から派遣された国司などの役人によって、直接国家の支配を受けるようになりました。7世紀後半ごろ、律令制の下で、このような仕組みが始まりますが、地域の豪族と人々の支配関係を完全になくすことはできませんでした。

## 7 古墳時代の集落

古墳時代に入ると、外敵からの守りを重視した集落は姿を消しました。それかわって、5〜6軒でまとまった平地の集落が一般的になりました。農業や土木技術の進展とともに、集落の数は増えますが、集落の中の家の数は少なくなります。一方、豪族たちは、農民の集落から離れた場所に、地面に穴を掘って柱を立てた掘立柱式の住居を築き、倉庫には富をたくわえました。

## 8 紀国造

古事記や日本書紀に登場する日前神・国懸神は、紀の川流域の農業の神であったと考えられます。宮井用水を開き、広大な耕地を開発した紀氏は、日前・国懸神宮の祭をとり行い、この地域で最も有力な豪族として、大和王権から紀国造に任命されました。また紀氏は、すぐれた航海技術で、朝鮮半島へ行き来していたので、朝鮮半島の文化の影響を受け た遺跡が、和歌山市付近に見られます。

## 30 和歌山藩の交代兵制

明治時代の初めに、最後の藩主・徳川茂承は津田出に藩政改革を命じました。なかでも、兵制改革は重要な柱のひとつで、全国にさきかけて「交代兵」制度と呼ばれる徴兵制を実施しました。軍事顧問にはカール・ケッペンを招き、プロシア式の軍事訓練を行いました。軍隊の近代化は、武器や軍服の製造という関連産業を生み出し、綿ネル・皮革製品など、和歌山の地場産業の基礎となりました。

## 28 紀伊藩の文芸

紀伊藩は、御三家のひとつとして、それにふさわしい文化や芸術の育成につとめました。なかでも、10代藩主・徳川治宝が支援した表千家の茶道は、藩主から庶民にまで広がりました。借楽園焼・瑞芝焼・南紀男山焼など、江戸時代後期の紀州のやきもの、治宝の強い影響力のもとで焼かれました。また、祇園南海・桑山玉洲・野呂介石ら紀州の文人画家は、全国的にみても有名な存在でした。

## 10 紀国造

古事記や日本書紀に登場する日前神・国懸神は、紀の川流域の農業の神であったと考えられます。宮井用水を開き、広大な耕地を開発した紀氏は、日前・国懸神宮の祭をとり行い、この地域で最も有力な豪族として、大和王権から紀国造に任命されました。また紀氏は、すぐれた航海技術で、朝鮮半島へ行き来していたので、朝鮮半島の文化の影響を受けた遺跡が、和歌山市付近に見られます。

## 11 武士団の時代

平安時代後期になると、紀州には多くの武士団が登場しました。彼らは、荘園の中心地や交通の便利なところに屋敷を建て、多くの家来を従えて、百姓たちを支配しました。紀州の代表的な武士団には、有田川下流域を中心として、一族で紀北一帯を支配した湯浅党、現在の橋本市隅田付近の隅田党、現在の紀の川市打田周辺の佐藤一族、熊野三山を治める熊野別当が率いた熊野水軍などがあります。

## 25 紀伊藩と紀伊徳川家

江戸時代の初め、元和5(1619)年に広島に移るまで、紀伊国は浅野氏が2代にわたって藩主でした。それに代わって、徳川家康の十男・徳川頼宣が入国して、55万5千石を領有し、高野山寺領をのぞく紀伊国の全域と伊勢国の南部が紀伊藩領となりました。御三家の一つであった紀伊徳川家には、家康の重臣が「附家老」として派遣され、新宮には水野氏、田辺には安藤氏が配置されました。

### 27 学問の発達

紀伊徳川家は、優秀な人材を招き、御三家にふさわしい学問を備えようしました。初代藩主・頼宣は、儒学者の李真栄に学問を教わりました。10代藩主・治宝は、国学者の本居宣長を松坂から招いて講義を受け、その養子・大平は和歌山に移り住みました。このほか、世界で初めて全身麻酔による乳癌手術を行った、華岡青洲のような優れた医学者を生み出しています。

## 13 紀州の荘園

律令制の下では、土地は国のものでしたが、平安時代のなかごろになると、皇族や貴族・寺社らによって土地が私有されるようになりました。初めは、田畠や百姓が個別に荘園の中で支配されていました。11世紀後半以降、人・集落・耕地・山林などを一体として支配する領域型荘園が現れました。紀州では紀北、特に紀の川流域を中心に、多くの荘園が成立しました。

### 12 闘う民衆

荘園に住む百姓は、荘園領主に年貢を納め、労働奉仕をしなければなりません。また、現地の管理人として武士が任じられていた下司や地頭らも、様々な負担を要求しました。百姓たちは、皆で負担を拒否して、要求が受け入れられるまで村に戻らない「逃散」という戦法を、よく用いました。また、訴状を作って、下司や地頭のひどい行いを、直接荘園領主に訴えることもありました。

## 24 風土と生産

高く深い山、半島を囲む黒潮の海。こうした雄大な自然に囲まれた紀州の人々は、時には自然の厳しさに立ち向かいながら、その恵みを引き出していきました。そこで生み出された技術は、紀州から全国各地に広まり、伝統的な技術として長く伝えられているものもあります。これが、紀州の地場産業の発展につながり、今日まで伝統的な生産品として残されているものを生み出したのです。

### 26 大畑才藏と小田井

伊都郡学文路村の庄屋であった大畑才藏が指揮して、紀の川の北岸を灌漑する用水路・小田井が完成したのは、江戸時代中ごろのことでした。才藏は、いくつかの工区で同時に作業を進め、工事期間を短縮しました。また、水盛器という水準器を用いて、正確な測量を行いました。彼の土木工法は、現在の海南市にある亀池を築造した井沢弥惣兵衛とともに、「紀州流」と呼ばれています。

## 14 紀州の古代寺院

約400年間にわたって古墳が造られ続けてきましたが、7世紀後半になると古墳に代わって、豪族の氏等が建てられ始め、県内では白鳳時代の寺院は、現在のところ15か寺が知られています。その遺跡からは、都の寺院と同じような瓦が出土しています。奈良時代に入ると、国ごとに国分寺や国分尼寺が建てられるなど、国家による地域の仏教への支配が強まってきました。

### 16 空海と高野山

弘法大師空海は、延暦23(804)年に遣唐使の一行に加わり、最澄らとともに中国に渡り、唐の都・長安で2年間、真言密教を学びました。日本に帰国したのち、嵯峨天皇らの支援を受け、弘仁7(816)年に高野山金剛峯寺を開いて、真言宗の開祖となり、多くの人々に信仰されました。なお、高野山は熊野などとともに、平成16(2004)年に世界遺産「紀伊山地の霊場と参詣道」に登録されました。

## 21 戦国都市 根来

現在の岩出市内にある根来の地は、南海道にほど近く、西側には和泉国に抜ける根来街道が走っています。こうした交通の要衝に建てられた根来寺は、戦国時代、単なる寺院ではなく、一つの都市として発展しました。境内の中には堂舎が立ち並び、門前町の坂本地区には町屋が軒を並べていました。そして、様々な経済活動を短縮しました。紀州では、頼瀧寺・湯河氏などの勢力を一気に減ぼされていったのです。

### 23 中世の終焉

天下統一を進める織田信長は、本願寺を支援する紀州の各地域の勢力を攻めましたが、十分な成果を上げることはできませんでした。後をうけた豊臣秀吉は、四国攻めを行う直前に、10万人の大軍を率いて紀州に攻め込み、雑賀衆・根来寺・湯河氏などの勢力を一気に減ぼしました。その後、秀吉は和歌山城を築いて、弟の秀長に支配をまかせ、全国にさきがけて刀狩りを実施しました。

## 15 紀州の霊場

北に高野山、南に熊野、そしてその間をつなぐように開かれた観音霊場。都から比較的近い場所でありながら、深い自然にかこまれた紀伊国には、多くの信仰の場が生まれました。平安時代以降、神仏の救いを求める参詣者が、続々と紀伊国を訪れました。そして、信仰を広めるために、寺社の成立や歴史を語る縁起絵巻や、神仏のすがたを目に見るようにあらわした曼荼羅図など制作されました。

11世紀の終わりに、皇族や貴族の度重なる熊野詣が始まりました。上皇たちの参詣は、白河・鳥羽・後白河・後鳥羽の4代の間に90回以上行われました。鎌倉時代より後には、「囃の熊野詣」といわれたように、武士や庶民も続々と参詣の旅に出かけました。女性や身体障害者など、他の寺社では参詣が認められていなかった人々を受け入れていたことも、熊野信仰の大きな特色です。

平安時代後期、浄土信仰の広がりのもと、熊野は阿弥陀如来あるいは観音菩薩の住む場所とされ、そこに参詣することで死後、極楽に行くことを願い、この世での幸せなど様々な望みも、熊野の神仏に願うようになりました。こうした信仰の普及を支えたのが、檀那とよばれた信者を熊野へ連れてきた先達や、絵解きという布教を行いながら諸国をまわった熊野比丘尼らの活動です。

鎌倉時代の後半になると、農民たちは惣村と呼ばれる自治組織をつくるようになりました。彼らは寄合という話し合いによって掟を定め、用水路や池を共同で管理しました。年貢が増やされるなど、不利益なことが起こると、武器をとって武士と戦い、また用水の配分をめぐる隣の惣村と争うこともありました。紀州では、頼瀧荘や粉河荘 東村など、紀の川流域に多くの惣村がありました。

### 22 動乱の時代

紀州でも、武士や寺院などの勢力は、南北朝時代の動乱に巻き込まれ、紀州最大の武士団であった湯浅党は、南朝とともに滅びます。その後、紀中・紀南では、湯河氏・玉置氏などの豪族があらわれ、紀北では、雑賀衆や根来寺・高野山などの勢力が有力でした。紀州の戦国時代には、こうした勢力がそれぞれの地域を支配するにとどまり、1国全体を支配するような戦国大名は現れませんでした。